

協働の 輪を広げる、 働きかけ方

地域の人々と協働で何かを始めるとき、
企業や団体はどのようなことを
心掛けているのでしょうか。

学校が外部と協働するうえでのヒントを探るため、
長野県松本市の銭湯と
沖縄県大宜味村の観光協会で働くお二人に
具体策やマインドについて伺いました。

CASE

1



菊の湯
(長野県松本市)

CASE

2



おおぎみそん
大宜味村観光協会
(沖縄県大宜味村)



CASE 1

菊の湯（長野県松本市）

北アルプスの玄関口、松本駅から続く大通り沿いに建つ銭湯「菊の湯」は、
山から流れる地下水を沸かすなど、「街と森を結ぶ湯屋」がコンセプト。

地域の人々が集うコミュニティハブの機能も果たしています。

湯屋チーフの鮎沢日菜子さんに、協働の価値と関わり方について伺いました。

菊の湯は100年近くの歴史をもつ老舗の銭湯だが、時代の波に抗えず、数年前に一度閉業しかけている。しかし、「銭湯がある街の風景を残したい」と、向かいの書店兼喫茶店「栞日」のオーナーが事業を引き継ぎ、

クラウドファンディングで集まった資金を元に改装。2020年に再オープンを果たした。

その際、掲げた約束の一つが、菊の湯を慕い、通っていたご近所さんにとって、変わらず心地よい場であり続けること。そのうえで、

若者を含めたあらゆる世代が湯を共有し、コミュニケーションが交わされる社交場としての姿を取り戻すことだ。そのため新生菊の湯では、地域の人々との協働によって二階の休憩室を舞台に、整体マッサージやワークショップ、演奏会や上映会などが頻繁に開催されている。

こうしたイベントの企画のほか、日々の湯沸かしや掃除、番台業務を担当するのが、三代目湯屋チーフの鮎沢日菜子さんだ。愛知県の大学で学び、社会福祉士として働いていたが、コロナ禍で地元でUターン。リニューアルの1年後に、スタッフの仲間入りをした。

「大学時代からいくつかのNPOに携わり、地域の人が集まる場所で働きたいと思っていました。なかでも、一人暮らしをしていた祖母から『風呂友がいるのよ』という話を聞き、そうした豊かな人間関係が築ける場があるの

なら、続けてほしいという思いがありました」

学生スタッフの「やりたい」から 始まった「菊の湯てらこや」

湯上りに楽しめるイベントを多くデザインしてはいるが、必ずしも湯上りである必要はないと鮎沢さん。

「銭湯に来る習慣がない方も大勢いるわけで、足を運ぶきっかけにしてほしいんです。そのうえで『こんな楽しい場所なら、次はお湯に浸かりたい』という気分になっていただければ嬉しいです」

そんなことから始まったイベントの一つが、「菊の湯てらこや」だ。月に2回、週末の菊の湯に小学生が集まり、大学生と一緒に遊んだり、宿題をしたり、お風呂に入ったり。2022年当時、教育学部で学んでいた学生ス



この方に聞きました

菊の湯 三代目湯屋チーフ
鮎沢日菜子さん

あいざわ・ひなこ ● 1994年長野県生まれ。総合学科高校で福祉の世界を知り、愛知県の日本福祉大学に進学。在学中、福島の子どもたちの支援などボランティア活動を積極的に行う。卒業後、福祉系のNPOに勤務したのち長野県にUターン。書店兼喫茶店「葉日」や、銭湯「菊の湯」を経営する株式会社葉日に転職。湯屋チーフとして、湯沸かし、掃除、番台業務のほかマネジメント業務にも携わる。

タッフの、そんな居場所があればいいのに、というつぶやきに反応した鮎沢さんが、「いいじゃん、みんなを巻き込んでやろうよ」と背中を押したことで始まった。

「私自身がリーダーシップを発揮するというよりは、スタッフや地域の人との会話のなかで、『こんなこと、できたらいいな』といった声を拾い、いいねと後押しし、どうしたら実現できるか考えることが好きなタイプなんです」

開始から数年。課題は、発案者の学生スタッフが大学卒業後、誰が中心となって継続するかだった。

「他の学生スタッフに声を掛けたものの、手伝いはするけど中心でやるのは…、という感じ。やりたい気持ちがあって初めて活動は続くものなので、どうしたものかと発案者の学生と話し合ったところ、ゼミの先生の協力で、教

育学部の後輩が引き継いでくれることになったんです。菊の湯のバイトでもないのに、わざわざボランティアで来てくれて大変ありがたいです。将来的には、今、てらこやに來ている小学生たちが大学生になったとき、手伝ってくれるような循環が生まれると素敵かなって」

「おやこ菊の湯」という人気の企画もある。小さい子を抱える親御さんが、のんびり湯船に浸かれるよう、男女それぞれの脱衣所に、お子さんの着替えや入浴を見守るボランティアを配した定例イベントだ。

「親子という新たな客層に来てもらう目的もありますが、ご近所との繋がりが希薄で、子育てが“孤育て”になりがちな育児状況もあるなか、社会福祉士である私の課題解決の一方策にもなっています。そんな思いが伝わるのか、あるお母さんから、『私も、こうした子

SUMMARY

協働の 目的

あらゆる世代が湯や場を共有し、コミュニケーションが交わされる社交場としての姿を取り戻す。100年続く銭湯を、単なるお風呂に入る場所ではなく、街との接点を意識した人・モノ・コトが交差する場に。

協働する 相手

地域の人々。常連客だけではなく、観光客や若者、親子など新たなユーザー層。企業や団体など数多くのコラボレーション先。

働きかけ方 の工夫

まずは、やりたいと思ったことを周囲に話してみる。直接協力を得られなくても、適任者を紹介されたり、アドバイスをもらえたりすることも。また、依頼する側・される側という固定化した役割ではなく、いつでも立場が入れ替わられるよう意識することで、関係性が持続的、発展的になる。

育てに優しい場所をつくりたいと思っていました。今は育児で忙しく、一緒にやることは難しいけど、落ちついたら何か活動したい』と言われたことも。信念をもって続けていれば、賛同者が現れるんだなって、力を頂きました」

地元の高校生や教員の「やってみたい」も応援する

こうした活動によって、「菊の湯=銭湯」という認識から、次第に「お風呂もある、面白いことができる場所」と認知されはじめ、外部からもさまざまな企画が持ち込まれるようになった。

「銭湯好きの高校生から、探究の授業の一環で、石鹸づくりのワークショップができないか相談されたこともあります。同級生の多くが銭湯体験がないことを知って驚き、銭湯の魅力を伝えたいというのです。知り合いの大人を講師に、宝石のようにキラキラした石鹸をみんなで作り、その後銭湯の見学ツアーを行うというユニークな内容で、企画から告知までその生徒が中心になって行い、二度開催しました」

まさに、高校生の「やってみたい」を後押しした形だが、何でもかんでも引き受けるわ

けにはいかない。どういうケースであれば断っていただろうか。

「『課題なので仕方なく』という様子が垣間見えたら、『自分の気持ちをよく考えてから、もう一度来て』と言っていたかもしれません。

ただ、私も学生時代、周囲の大人に応援してもらっていたわけで、時間が許す限り、教育や子育てをサポートしたいと思っています」

教員が、こんな依頼に来たこともある。

「最近も県内ニュースで取り上げられていましたが、長野県では、学校の先生が地域の企業で数日間、職場体験をする研修制度があるそうなんです。受け入れ先は自ら開拓する必要があり、一昨年、菊の湯と栞日に、研修を依頼しにきた工業高校の先生がいらっしゃいました。生徒の就職に関係ありそうな工場などではなく、自分が知らない職場を体験したかったそうです。私にとっても、学校の先生はどんな職業なのか興味があり、2日間一緒に働くなか、やりがいや悩みなどの本音が聞けて楽しかったです」

まずは周囲に話してみる そこから始まる新たな可能性

地域のさまざまな人々と協働の輪を広げて

手伝ってもらう側が今度は手伝う側に。
そんな関係がコミュニティを豊かにする

いる鮎沢さんに、働きかけ方のヒントを聞いてみた。

「やりたいことがあるなら、漠然としていても、まずは周囲に話してみることではないでしょうか。最初から協力を依頼するのではなく、『こんなことを考えているけど、どう思いますか』くらいの聞き方にとどめ、①『面白そうだね』と言われれば『一緒にやりませんか』と誘いやすいし、②『自分は興味ないかな』と言われたら『興味ありそうな方がいたら繋いでもらえませんか』と頼めばいいし、③『それってうまくいくの』という顔をされたら、問題点はどこかを教えてもらうこともできると思います。

あと、経験上、『主催者と参加者』『助ける人と助けられる人』など立場が固定化した関係性に違和感をもっていました。おやこ菊の湯のエピソードのように、今は『手伝ってもらう側』だけど、次は『手伝う側』にも回れるような関係を意識的につくることで、コミュニティは発展するし、持続可能になると思うんです。例えば菊の湯には時々、『定期演奏会の協賛をお願いします』などと高校生や大学生がスポンサーを募りにきます。そんなときは、『どんな思いで実施するの？ 誰に来てほしいの？』と聞くとともに、菊の湯のパンフレットを渡して、『こんなイベントを企画しているから部



老若男女がくつろげる畳敷きの広々とした二階休憩室。左の棚は、登山用リュックも入る大型のロッカー。リノベーションには信州大学の学生も関わった。

活のみんなで来てね』と付け加えるようにしています。応援する側とされる側の関係で終わってはもったいない。その先まで意識して、良い関係を築いていきたいと思っています」

取材後記

二階での取材中、「玄関前に暑くてバテ気味のおばあちゃんがいる」という、子どもたちの呼びかけにすぐに反応した鮎沢さん。オープン前のロビーでその方の話を聞き、休ませてあげていました。困ったときは支え合うという、地域本来の豊かな人間関係が、菊の湯の周辺にはありました。

学校が外部の人と協働で何かを行おうとするとき、「失礼があったら」「迷惑ではないか」と気後れしそうですが、地域には、若者の成長に協力したいと考える大人が少なからずいることを素敵だと思いました。



CASE 2

大宜味村観光協会（沖縄県大宜味村）

沖縄本島北部・やんばる（※）にある大宜味村。

その観光協会で、会長兼事務局長を務める大崎史丸さんは東京からの移住者です。

その“よそ者”が、「おじい・おばあ」をはじめとした地元の住民と、どのように関係性を築いてきたのか。

協働する際に心掛けていることなどを伺いました。

沖縄本島北部に位置する大宜味村は、美しい海と森林に囲まれた、人口3千人に満たない小さな村だ。「長寿の里」「シークワサーの里」とPRしているが、近隣の自治体と比べ、観光地としての派手さはない。そんな村

の観光協会で働くため、映像制作の仕事を辞めて2021年に東京から移住してきたのが大崎史丸さんだ。翌々年には、会長兼事務局長となり、村の観光振興に力を入れている。地元の魅力発信だけではなく、官公庁のモ

※沖縄本島北部の、山や森林など自然が多く残る地域。



デル事業に携わるほか、役場が公募する町おこし関連の事業を積極的に受託。“長寿の観光資源化”から、世界自然遺産の生態系を守るための保護猫の里親募集まで、活動の幅は広い。最近は、大学生や高校生の研修も熱心に受け入れている。

そうした実績から、強い目的意識をもった町おこしの仕掛け人をイメージしそうだが、未来のビジョンを全面に押し出して仕事の計画を立てるタイプではない。村の人たちと酒を酌み交わし、時間をかけて関係性を築きながら、必要なことを少しずつ形にしていくスタイルだ。

「事情を知らない“よそ者”が熱をもって、あれこれやろうとしても空回りし、求められていないことまでしがちです。誰かと協働するにしても、相手の性格や嗜好、得意分野を知らずに協力依頼するのは違うと感じていて、時間をかけて信頼関係をつくるのが、長く関係性が続くための近道だと思います」

大崎さんが、村の人に会いにいく際、決めていることがある。できるだけ、後ろに予定を入れないことだ。

「本当の用事は10分で終わるとしても、今朝採れた野菜の話や、お孫さんが遊びに来た話など、前後の世間話にこそ、その方の人柄や悩み、やりたいことなどヒントが隠れています。なので、『次の予定があるので、この辺で失礼します』とならないよう心掛けています。そうやってとことん話を聞くようにしていると、



この方に聞きました

大宜味村観光協会 会長 兼 事務局長

大崎史丸さん

おおさき・ふみまる ● 1987年大阪府生まれ。東京の映像制作会社に13年間勤めたのち大宜味村へ移住。2021年より一般社団法人大宜味村観光協会に勤務し、翌年事務局長、翌々年会長兼事務局長に。移住5年目の現在は「観光は、対話と交流をひらくもの」という視点から、村の未来を考える観光教育や、村人の暮らしを訪れる人にそっと手渡すようなプロジェクトに取り組む。

今もよそ者扱いではありますが、『困ってるんだけど、いいアイデアないかな』など、向こうから声をかけていただけるようになってきました」

ただし、と付け加える。

「人の話を聞くと言いつつ、自分のこともべらべら喋っているんですけどね。相手は、近所のおじい・おばあだったり、役場の職員や観光事業者、観光客、滅多に会えないお偉いさんだったりさまざまです。そうした場では、『なんとなくこんなこと考えてるんです』くらいの軽い気持ちで、言葉自体も未熟なんだけど、口にすることで、相手から反応があるし、自分でも持ち帰って勉強するじゃないですか。

そうやって学び、考えを深めるなかで次第に、未熟だった言葉が、自分自身の本当の言葉に変わっていく気がするんです。すると、幸運なのか必然なのかはわかりませんが、関連する人を紹介されたり、貴重な情報を頂いたり、どこからともなく解決の糸口が訪れる。最初に意味を深く考えることも大切かもしれませんが、それで言葉や行動が止まってしまうのはもったいない。意味はあとから育つものだと思っています」

村の魅力と課題を広める 仕掛け「おおぎみ案内人検定」

大宜味村観光協会では、大掛かりな観光イベントには力を入れていない。

「それよりも、地域の人々との日々の関係性づくりが役割だと思っています。言うならば、

Doing（単発のイベントや目に見える成果）より、Being（日常や暮らし、過程）の中にこそ、深い学びと問いが宿ると考えているんです。豊かな自然も自慢ですが、大宜味村最大の魅力は、土地に暮らす人そのもの。日々の生活の積み重ねの上に、素晴らしい文化があることを観光客はもちろん、村民にも再認識してもらいたくって」

そこで役場との協働で計画中なのが「おおぎみ案内人検定」というエンタメ要素の強い観光教育プログラムだ。住民が村について学び、暮らしを見つめ直すことで、一人ひとりが“村の観光案内人”になることを目指している。

「検定といっても、好きな時間にオンラインで受講できる簡単な内容です。問題の中には、村の魅力だけではなく、例えば400年続く祭りがあるけれど担い手不足で困っているとい

SUMMARY

協働の 目的

生物多様な自然を除き観光資源に乏しいと思われがちな大宜味村の最大の魅力は、そこで暮らす人々そのもの。その価値を、観光客はもちろん村民自身に認識してもらうため各所と地道な関係づくりを行う。

協働する 相手

観光事業者、役場の職員、おじい・おばあほか地域住民、地元の中学校、研修受け入れ相手の教育機関や学生・生徒など。

働きかけ方 の工夫

まずは相手の話をとことん聞き、信頼関係を築くことからスタート。一方で、言語化手前の自分の思いを誰彼となく話し続けることで、言葉の意味を育てていく。また、わからないことは素直にわからないと言うことから対話を広げていく。

った“弱み”も伝えたい。それによって観光客や、元村民が特産物を購入したり、村を再訪したりなど、手を差し伸べてくれる機会になればなって」

**誰かのお仕着せではない意図せぬ
交流だからこそ生まれる関係性**

今年度は、大学生や高校生の研修も積極的に受け入れた。

「大宜味村の魅力は暮らしそのものとは言ったものの、村には宿泊施設が少なく、日帰りの観光客が多いのが課題です。そんなことを、やはりいろいろな場所で口にしていたところ、武蔵野大学ウェルビーイング学部の先生を紹介いただき、実習先の一つとして、この夏19人の学生を受け入れることになりました。特別なプログラムではなく、自炊しながら16日間暮らし、村の魅力を探るだけ。2週間近くいると、おじい・おばあも気になるのか、『バナナが食べ頃だから取りにおいで』『三線を弾けるおじいを呼ぶから一緒に踊ろう』など、意図せぬ交流が始まりました。各自がウェルビーイングとは何か実感したことでしょうし、私自身、無理に“長寿”を観光コンテンツにしなくても、共に過ごすだけで、観光になるんだと

気づかされました」

**わからないと言った途端
不思議と、わかる人が現れる**

大崎さんは、地元中学校の総合的な学習の時間でも外部講師をしている。

「村の教育委員会から『教員歓迎会で、大宜味村について語ってほしい』と依頼され、教育と観光の関わりについて話したことがきっかけです。初年度、観光をテーマに10回の講座を担当し、3年目の今は、担任の先生たちと相談しながら週1回、全30回の講座を開催しています」

学校と協働するなかで、どんなことを感じているだろうか。

「学校の先生は、言葉遣いに気をつける必要があるし、今どき、うかつに叱れない事情もありますよね。だからこそ私が代わりに、『世の中にはこんな大人もいるんだぞ』というスタンスで、本音で生徒に接しようと心掛けています。それに関連して、先生方も、わからないことは、わからないと生徒の前で発してもいいのでは、と感じています。私の経験上、わからないと言った途端、不思議とわかる人が現れるんです。答えをくれる人とは限りません。

話を聞く。思いも伝える。その時点では
曖昧な言葉でも、そのうち意味が育ってくる



夕方になると、近所の人と酒を酌み交わしながらの会話が始まる。白浜区長の親川富成さん曰く「たまに、見かけない若い人が来たら、どこからねとか聞いてね、そしたら話が盛り上がるでしょ。県外から来た人は、違った見方で村を見てくれるので楽しいよ」

同じく迷っている人や、かつて同じところで立ち止まっていた人からヒントをもらうこともあります。そういう私自身、東京で気を張っていた時代は、わかったふりをし続けていました。けれどそんな人間関係に疲弊してしまい、だからこそ『暮らしや会話が仕事の真ん中にある場所を探したい』とやってきたこの村では、わからないと声を出し続けたい。それが誰かとの対話の始まりになると信じています」



取材 後記

一般的に、他者と協働する際は目標を共有し、課題を洗い出して計画的に進めようと思いますが、大崎さんのアプローチは異なります。まずは相手の話をとことん聞き、信頼関係を築く。そこで生まれた思いや何気ない言葉に、時間をかけて意味を与え、成すべきことを見出していきます。ゴールをつくり、そこをみんなで目指すというよりは、まずは共にスタートラインに立ち、一緒に走り出すことを重視する。強固で、長い関係が続く秘訣なのかもしれません。